



Data

監督・脚本：ラース・フォン・トリアー

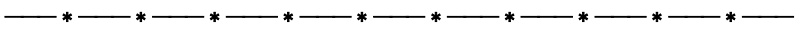
出演：マット・ディロン/ブルーノ・ガンツ/ユマ・サーマン/シオバン・ファロン・ホーガン/ソフィー・グローベール/ライリー・キーオ/ジェレミー・デビス

👁️👁️ みどころ

ラース・フォン・トリアー監督の“変わり者ぶり（？）”は『アンチクライスト』（11年）をみても『ニンフォマニアック vol.1/vol.2』（13年）をみても明らかだ。

“ある問題発言”でカンヌを追放された同監督が7年ぶりにカンヌ復帰を果たした本作のテーマは、何と最凶の殺人鬼の物語。“対談”形式で5話にわたって語られる殺人の“芸術性”とは？

カンヌでは中途退出者と絶賛者に二分されたそうだが、さてあなたは？



■■■ラース・フォン・トリアー監督に注目！■■■

カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞したラース・フォン・トリアー監督の名作『ダンサー・イン・ザ・ダーク』（00年）は、かなり変わった映画だった。そのラース・フォン・トリアー監督の続く『アンチクライスト』（11年）（『シネマ26』83頁）は、「セックス」をテーマとしたもので、タイトルが挑発的なら、エデンの園（？）でくり広げられるアダムとイブ（？）の営みも刺激的、いや暴力的だった。そして、これでもか！これでもか！とエスカレートするシーンには、思わず身体が硬直した。

さらに続く、「色情狂」をタイトルとし、「性の旅路」の語り＝異常性欲の体験談が延々と続く『ニンフォマニアック vol.1/vol.2』（13年）もすごい映画で、私は「ラース・フォン・トリアー監督はよほどの変わり者・・・？」と評論した（『シネマ33』91頁）。

■■■なぜ152分の完全ノーカット版が日本で上映？■■■

“ある問題発言”をしたことでカンヌから追放処分を受けたトリアー監督は、本作のアウト・オブ・コンペティション部門出品で7年ぶりのカンヌ復帰を果たした。ところが、本作の公式上映は、観客の想像をはるかに超えた過激な仕上がりのためか、一方では途中退出者が続出し、他方では上映終了後に盛大なスタンディングオベーションがわき起こるという、賛否両論まっぴたつの異様な興奮に包まれたようだ。

そんな本作は米国映画協会（MPAA）の審査により全米公開時には一部本編がカットされたが、日本では完全ノーカット版152分の上映が実現した。しかし、それは一体なぜ？

■□■5つの殺人の物語の“対談者”は？■□■

学生時代に日活ロマンポルノをたくさん観てきた私には、ワケのわからないケツタイなラース・フォン・トリアー監督の色情狂の物語より、日活ロマンポルノのそれの方がよほどわかりやすかったが、“芸術性”という観点からはラース・フォン・トリアー監督はすごいらしい。

もっとも、セックスや色情狂をテーマとしたこれらの作品（？）に対して、本作は最凶の殺人鬼ジャック（マット・ディロン）が語る5つの殺人の物語だ。ラース・フォン・トリアー監督は「対話」や「対談」が大好き（？）だから、『ニンフォマニアック vol.1/vol.2』では、自らを「色情狂」と認める女性・ジョーが、「性の旅路」を語るについて聞き手となる読書好きな初老の男・セリグマンを用意し、うまくジョーの語りを引き出していた。それと同じように本作では、『ヒトラー ～最後の12日間～』（04年）（『シネマ8』292頁）等で有名なドイツ人の名優ブルーノ・ガンツ扮するヴァージという謎の男がジャックに論争を挑み、うまく論点を整理しながら、ジャックから殺人のエピソードを引き出す役割を果たしている。

■□■第1の殺人には納得？しかし、他の4つは・・・？■□■

私はタランティーノ監督が大好き。そして、タランティーノ監督は日本のチャンバラ、ヤクザ、演歌が大好きだ。そんなタランティーノ監督の傑作の1つが、『キル・ビル（～KILL BILL～Vol.1）』（『シネマ3』131頁）、『キル・ビル（～KILL BILL～Vol.2）』（『シネマ4』164頁）。同作で「ザ・ブライド」と名乗るかっこいい金髪のヒロインを演じた女優がユマ・サーマンだ。

しかして、本作でジャックが語り始める第1の殺人のターゲットは、ジャックの車を停めた女だ。彼女がジャックの車を停めたのは、車を修理中にジャッキが壊れてしまったので、通りかかった車に救いを求めるため。通常それは同情すべき事態だから、しぶしぶジャックがこの女の願いを聞き入れ、ジャッキを修理してくれる友人の工場まで乗せてやったのだが、この女の口のうるさいこと……。しかも、そのお喋りのテーマが「ひょっとして、あなたが殺人鬼だったら……」だから、ジャックは頭にくることこの上ない。こ

んな女なら、ジャックが殺人鬼ならずとも思わず殺したくなるのも当然・・・？しかしで・・・？

ちなみに、『キネマ旬報』2019年7月上旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」によると、「ジャッキは英語ではジャック」らしい。したがって、本作はジャッキが壊れたところから始まるジャックの崩壊の物語らしい・・・。なるほど、なるほど。しかし、他の4つは・・・？

■□■ジャックは建築士！彼が目指す芸術は？理想の家は？■□■

『ニンフォニアック vol.1/vol.2』では計4時間の長丁場にわたって、計8つの物語が語られたが、本作で語られる殺人のエピソードは計5つ。同じ日に観た『ガラスの城の約束』の父親は「ガラスの城」を作ることを4人の子供たちに約束していたが、彼は単なる技師だった。しかし、本作の主人公ジャックはレッキとした建築士で、理想の家を何度も作っては壊し、壊しては作っていた。これは、「崩壊してはじめて真の美しさに達する廃墟のための建築」を目指しているためだが、それって一体ナニ？また、彼は建築を通して“真の芸術”を求め、“真の芸術家”になろうとしていたから、彼の殺人には貴腐と呼ばれる最高級のワインを作り出す腐敗が不可欠だったらしい。そのため、彼が死体置き場としている冷凍室の中は・・・？そして、「理想の家」を建てるためにたどり着いた「理想の材料」とは・・・？

前述したとおり、本作でジャックが語る第1の殺人はある意味で私も納得できるもの(?)だったが、以降の4つのエピソードは身の毛もよだつ恐ろしいものばかり。かなり気味悪くなってくるから、これなら体調を崩して途中退出する人が出て不思議ではない。本作でジャックを演じたのは、個性派の名優マット・ディロンだが、彼はどんな風にジャックの気持ちを理解し、それに同化してこの役を演じたのだろうか。そんなことも考えながら、是非本作は最後まで鑑賞し、“後味の悪さ”もしっかり味わいたい。

2019（令和元）年6月25日記